可麻度柔播、火氣布伎多氐受、許之伎爾波、久毛能須可伎氐、飯炊事毛和須禮提、〇下略

〔成形圖說五農事〕比米

萬葉集貧窮問答の歌に甑には蜘窠布て飯炊ことも忘れてとあるを考へ、むかしは上下共に蒸飯なるを知らる、

〔空穗物語吹上之下〕おほい殿廿石いるかなへどもたてゝ、それがほどのこしきどもたてゝいひかしぐ、きさのきにくろがねのあしつけたるふね四たてなめて、みなしなゝなるいひかしぎいれたり、所々のさうしどもつかいとおのこにひつもたせて、いひばかりうけたり、〇下略

〔守貞漫稿後集食類一〕飯

メシハ今云强飯ヲ本トス、蓋甑ニカケ蒸ト雖トモ、平食ニハモチゴメニハ非ズ、ウルシチナルベシ、

天子ノ供御ニハ、右ノ蒸飯ヲ用ヒ玉フト也、攝家モ用之ト也、然レドモ今モ天皇攝家等用之玉フ歟、高貴ノコトハ是ヲ知ラズ、

今世モ幕府以下大名ハ、一粒撰ト云テ、白米ヲ一粒々々擇立テ、釜中ニ炊ギ食シ玉フ也、〇中略

〔勘者御伽雙紙下〕爨法の事

たとへば、釜にて古米壹升五合を食に燒んと欲するとき、其水何程と問、答云、水壹升九合三勺七才五、術曰、米の升目を置て、是を九倍して定法二升をくはへ、得數を八ッに割れば、水の升めしらるゝなり、しかれども升め又は火の燒やうそまつにてはあひがたし、故に諺に、食たくば、始めちよろ〳〵、中くわつくわ、親はしぬるとふたとるなと云傳へたり、但し鹽の入食と、鍋にてたくとは、少し水を控ふべし、

〔日用功食〕竈の賑ひ〕夏飯の腐らざる焚やう